

浄土真宗の根本精神としての弥陀の本願

長谷 正當

〔一〕 「釈尊は弥陀の本願を説いた」とはどういうことか

「浄土真宗とは親鸞の仏教史観である」（曾我量深）。「仏教の歴史は本願の歴史であり、本願を説いたのは釈尊である」（親鸞の仏教史観）。

「それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施することをいたす。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。ここをもって、如来の本願を説きて経の宗致とす。すなわち、仏の名号をもって、経の体とするなり」（『教行信証』教巻、『聖典』152頁）。

曾我が、浄土真宗を親鸞の仏教史観として捉えようとした理由。

「今、ここに阿弥陀仏の48願といふことに就いて、私の考へを少し述べさせて貰ひたいと思ふのでありますが、この48願に就いてはすくなくとも、今日この席においでになつて居られる方々は皆知つて居られることと思ふ。しかしながら、一人として本当のことを知つて居るものはあるまいと思ふ」（曾我、『選集』10巻/103頁）

「釈尊は弥陀の本願を説いた」という親鸞の言明は、明治期に成立した文献学的・実証的な近代仏教学によって無意味化された。そのことは、この親鸞の言明の意味を反省させ、浄土真宗が自らの基礎について明確な自覚をもつことを要求する。

〔二〕 仏教の最高の法語としての「得・阿耨多羅三藐三菩提」

「仏教とは仏陀になる教であり、仏陀を説く教である。仏をして真に仏たらしめ、同時に衆生をして仏たらしめんとする教である。今日の仏教学者の研究の方針は、仏教といふものは仏陀が説いた教だ。したがつて、仏陀が説いたか説かぬかだけが問題になつてゐる。しかしながら、われわれの問題は、仏陀が説いたか説かぬか、こういふことも重要な問題に違いないが、それよりも、もつと重要な問題は、仏教といふものは仏になる教、仏を説く教なのだ。親鸞の仏教は、仏自証の教、仏自説の教である。しかるに、このごろの仏教研究は、仏になる、仏を説くといふことをのけ者にして、ただ仏陀がどういふことを説いたか、したがつて、仏陀が説いた教から推論してその所証の道を想定するにすぎない」（曾我『選集』5巻/397頁）。

近代仏教学がはらむ難点

「仏陀が説いたか、説かないか」を決めることにのみかかわり、「仏になるかならぬかという実践の事業」を問題にしない仏教研究の立場は「一貫した仏教の真理の体」（同、5/395頁）をもたない。「そういふ仏教史観は宗教否定の唯物論といふ基礎に立つて仏教滅亡を説明するところの仏教唯物史観」（曾我、『選集』5巻/395頁）である。

「釈尊は弥陀の本願を説いた」という親鸞の言明は、釈尊が文字通り語つたという意味では否定される。しかし、「釈尊の正覚の内実」を語つたという意味でなら、真理性をも

つ。

「釈尊が弥陀の本願を説いた」という親鸞の言明は、「釈尊の正覚」を基点において捉えられなければならない。

「この〈得・阿耨多羅三藐三菩提〉は、仏陀（正覚者）としての釈迦牟尼その人と、歴史を通して現われてきた仏教との、すべてをそのひと言におさめていて、おそらくは、仏教最高の法語であろう・・・この言葉は、大乘経典に多くあらわれているが、本をたずねれば、釈迦牟尼自身が、自らに現れてきた不可思議荘嚴な精神的覚醒を深く礼拝して、〈私は無上の等正菩提を正覚した〉と、世のすべての人々に知らせたときに、初めて生まれたことばであった。それが、当時の仏弟子の人達、その後につづいた大乘の人々、それを受けた中国・日本の諸高僧から、現在のわれわれまで、人の心の無上の開覚をもって受持されてきた」（稲津紀三、『大信海』38・39号/5頁、1975年）

三） 釈尊の正覚と弥陀の本願とのかかわり

「正覚」は、何もないところで、釈尊の頭に忽然と浮かんだものではない。正覚は深い歴史的背景をもつ。それは、釈尊の人生と苦悩、インド民族の人生と苦悩、および、人類の苦悩と根本的要求を背景として生じた。

釈尊の正覚は人間の根源の要求を明確な自覚の光のうちに掲げたものである。人間が、その存在の底において、求めながら掴みえなかった根源の要求は、人間のうちにあって人間を超えており、「阿弥陀如来のいのち」に連なっている。そこに、釈尊の正覚が弥陀の本願と深く結び付いてくるゆえんがある。

四） 正覚の内実の表現としての別願（48願）

釈尊は『大無量寿経』において法蔵菩薩の48願を説いたが、そこで説かれた本願は正覚の内実の表現であった。序分の「五徳現瑞」はそのことを示している。釈尊の出世の本懐を語ることは正覚を語ることに外ならない。

「今日、世尊、諸根悦予し、姿色清浄にして光顔魏々とまします。明らかなる浄鏡の表裏に影暢するがごとし。威容顕曜にして超絶したまえること無量なり。未だ曾て瞻視せず。殊妙なること今のごとくましますをば」

「今日世尊、住奇特法。今日世雄、住仏所住。今日、世眼、住導師行。今日世英、住最勝道。今日、天尊、行如来徳。去来現仏、仏々相念。・・・何故威神、光光乃爾。」

五） 宗教的原理としての弥陀の本願—弥陀の本願と衆生の願いとのかかわり—

本願が如何に衆生とかかわるのかという問いは、一方的に法蔵菩薩の本願から問うては埒があかない。衆生の要求を踏まえ、両者の相関関係において追究されなければならない。

「仏様の本願といふのは、一方的な本願というものではありません。仏様の本願は、われらが生まれながらにしてもっている願ひ、だれでもがもっている願ひである。いろいろの願ひはあるが、基礎となる願ひには一切の人類に共通した願ひである。そのところに仏の本願といふものを感じるわけである。だから、仏様は一方的に本願をおこされるわけではありません。われわれの願ひというものと深い関係をもっているのです」（曾我、『選集』9巻/364頁）。

「親鸞聖人が『教行信証』の教巻に「大無量寿経真実の教」と見いだされたのは、『大無量寿経』の中に全人類を救済すべきところの宗教的原理がそこに遺憾なく開顕されているのを発見されたからであります。「如来の本願を説くを經の宗教となす」からであります。・・・その如来の本願とは何であるか。本願とはすなわち宗教の原理であります。しかし、宗教の原理とはわれわれ人間の最高最深の要求である。単なる私の要求ではない。人間としての私、全人類を内容としてこれを救うところの私の最高最深の要求である。すなわち、われわれ人類の最高最深の要求をもってその原理とするのである。宗教の原理はこれを外に求めずして、わがうちにこれを求むるのである。真実をわがうちに求め、真実にわが精神界に求めて、そこに宗教の原理を見いだすのである。しかし、これを開顕したのが阿弥陀仏の48願であると思うのであります」（曾我、『選集』10巻/108頁）

「如来は我なり。如来我となりて、我を救い給ふ。如来我となるとは、法蔵菩薩降誕のことなり」（曾我、『選集』12巻/408頁）

法蔵菩薩の本願は、人間の要求の底において人間を超えたものである。したがって、法蔵菩薩の本願は人間の深い要求を通してはたらく。

「法蔵菩薩の48願は、人間の歴史を貫通する原理なる、本性一にして、一如なる宗教的要求を表現したものである」

弥陀の呼び声を聞き取るには、それを自己の自己最内奥の要求において聞きとるのでなければならない。親鸞は自己の最内奥の要求を「欲生心」と捉え、「欲生心」を「如来招喚の勅命」と捉えた。自己の最内奥に出現して働いている如来の心（呼び声）が「欲生心」である。

六） 衆生の根源的要求

如来の呼び声が自己の最内奥の要求においてはたらくものであるなら、本願の呼び声を聞き取るには、われわれは自己の根源的要求を掘り出さなければならない。自己の根源的要求において感得されて、弥陀の本願は他人事としてではなく、「親鸞一人がため」として聞き取られてくる。

自己の根源的要求。自己がそれによって生きる力を得ているもの。「命の綱」、「生きる糧」ともいうべきもの。われわれは、それを環境から得ている。

身体的環境—水や空気や食物、大地。

精神的環境—文化、人々とのかかわり、人情、愛情。

それらを欠如するとき、人間は生きる力を失う。

本願が、環境に生きる衆生にとって生きる力となる時、本願は本願力となる。本願（因）が本願力（果）となるということで、私たちが思いをいたすべきことは、本願は環境、つまり宿業の世界においてはたらくということである。ここに本願の思想の要がある。

還相回向の思想の意義は、本願が働く場所としての自然的・歴史的「環境」に注目するところにある。環境において、本願は本願力となってはたらく。

「本願力の不虛作住持功德」一本願が衆生の世界において効力のあるものとなる。

本願が浸透している環境（浄土）とそれが奪われた環境（国有地獄・餓鬼・畜生）。

「自分が殺人を犯さないできたのは、殺人の衝動が自分のうちになかったからではなく、子供のとき、母に愛されたという記憶があったからである。」（ロバート・ベラー）

「内面性」－生きる力を汲み取ってくる源泉を心の内にもつこと。（V. フランクル）

「信」とはそのような内面性の世界をもつことである。孤独のなかにあって、自己の心の底に呼びかけてくる声を聞きとること。本願はそこにおいて生きる力となり、本願力となる。

七) 宿業の世界と本願

本願はそれ自体においてではなく、その働く場所である宿業のかかわりにおいて捉えられなければならない。本願が衆生の宿業の世界において働くとき、本願は本願力となる。

「願以て力を成し、力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず」（曇鸞『浄土論註』[観察体相章]）。

曾我は「宿業の世界」を「本能」と捉えた。それはわれわれの生きる宿業の世界は、本来、そこにおいてすべての生き物が感応・道交しつつ生きている深い生命の世界だからである。

しかし、宿業の世界は、現実的には感応・道交の断たれた世界、差別と不平等が支配する苦悩と怨恨の世界である。

それゆえ、断たれた感応道交を回復するものとして、宿業の世界に本願が出現してくる。本能の深みから本願が弾みで出現してくると曾我はいう。

八) 本願の歴史

仏教とは歴史的世界を貫いて流行してきた「本願の歴史」である。

衆生はその本願の歴史のなかで「生き」、本願の歴史のなかに「死ん」できた。

本願の歴史のなかで「生きた」とは、そこにおいて衆生が「現生正定聚」に住したということである。

本願の歴史のなかで「死んだ」とは、衆生が「必至滅度」に至ったということである。

親鸞は、そのような本願の歴史を、往相と還相の二方向によって渦流を描きつつ、衆生の歴史的世界を貫いて流行してゆく様において捉え、本願の歴史「二種回向」と名付けて、浄土真宗の教相の根幹に置いた。

親鸞は、本願の歴史を三国七高僧の伝統において捉えた。しかし、本願の歴史の母胎をなすものを親鸞は第十七願の「諸仏称名」の願に捉えた。「諸仏称名」は天上における神話的な出来事ではない。それは地上の本願の歴史を表現したものでなければならない。